

Q. 1 『よい授業』とは、どんな授業なのでしょうか。

A. 『よい授業』とは、一言で言えば、子どもが「わかった!」「できた!」という達成感を得られる授業と言えます。

子どもは、「学ぶ内容が面白い」「学ぶ活動が面白い」と感じたり、「学んだことが活かせる喜び」を味わったりしたいのです。このような子どもの思いをかなえることが教師の役目と言えるでしょう。

そのためには、子どもの思いを大事にしながら、子どもの知的好奇心をくすぐったり、学んだことを生かしたりするような授業展開を図っていくことが必要です。

子どもたちが意欲的で、主体的に学ぼうとしている授業が望ましい授業の姿であると言えるでしょう。もちろん、教師主導で授業を進めることも必要な場合がありますが、子どもが学習の見通しをもって進めていけるようにすることも大切なのです。

『よい授業』となるための条件として、以下に6項目を挙げました。当然、ここに示した項目以外にも条件となり得る要素は考えられると思いますが、まずは、6つのことを参考にして、実践されてはどうでしょうか。

#### ○『よい授業』で求められる条件

##### ◇指導のねらいがはっきりしていること

授業を行う上で、「何のために教えるのか」「どんな力を付けたいのか」ということを明確にしておくことが大切です。授業を組み立てていく際に、『指導方法』に意識が向いてしまい、大切な『指導目標』や『指導内容』が疎かになってしまうことがあります。そこで、まず、「付けたい力は何か」という指導目標を設定し、目標を達成させるためにはどのような教材を使って、どのような内容を指導すればよいのかを考えます。そして、どのような方法で指導していくのかということ計画していくのです。

##### ◇学習課題が子どものもものになっていること

子ども一人一人の考えを大切にし、単元（題材）の目標に迫っていくために、子どもの実態にあった適切な学習課題を提示することが必要です。学ばせたい内容などの具体的な事例を提示することで、子どもの驚きや疑問が生まれ、そのことが学習課題となることがあります。

##### ◇学習内容や活動の見通しをもたせること

子ども一人一人の問題意識を掘り起こし、多様な考えを生み出すために、学習の流れが明確でわかりやすく、子どもの意識に沿った学習活動や学習内容が無理なく計画されていることが大切です。

##### ◇子どもへの支援が適切であること

授業の中では、一人一人の子どもの理解度や活動の進度に差が生まれるものです。子どもが「わかった!」「できた!」という達成感を得られるようにするために、子どもの関心・意欲を高めたり、思考させたり、表現させたりする際には、個々の理解度や学習進度を考慮した支援が必要です。

##### ◇子どもの学ぶ意欲を高めていること

各教科等の学習では、子どもに知識・技能を身に付けさせるとともに、自ら学

ぶ力をはぐくんでいくことが大切です。子どもが自ら課題を見つけ、自分の考えをもって、課題を解決していくための力を付けていかなければなりません。例えば、子どもからいろいろな意見を引き出し、話し合いなどをうまく活用することで学ぶ意欲を高めることができます。

#### ◇学習評価が適切であること

教師が自分自身の授業の在り方を見直したり、個に応じた指導を行ったりするために、子どもが学習内容を理解する過程はどうであったのか、どの程度の知識を得ることができたのかなどをしっかりとらえておく必要があります。子ども一人一人の進歩の状況などを適切に評価し、その後の学習を支援する上で、有効に役立てていかなければいけません。

#### ○具体的な手立て

『よい授業』を行うための具体的な手立てとして、下のような項を示し、この後のページで解説します。

「1時間をどう構成するのか」【Q. 2】【Q. 3】  
「教材研究をどのようにするのか」【Q. 4】  
「授業に活きる学習指導案をどのように書くのか」【Q. 5】  
「学習評価をどのようにするのか」【Q. 6】【Q. 7】  
「発問をどう構成するのか」【Q. 10】  
「話し合いをどう効果的に進めるのか」【Q. 11】  
「子どもの発言をどう取り上げるのか」【Q. 11】  
「机間指導をどのようにするのか」【Q. 12】  
「板書をどう組み立てるのか」【Q. 13】  
「ノート・ワークシートの活用をどのようにするのか」【Q. 14】【Q. 15】  
「どの場面で小集団学習を生かすのか」【Q. 16】  
「学習環境をどのように整えるのか」【Q. 18】 など

#### ○教師にとって大切なこと

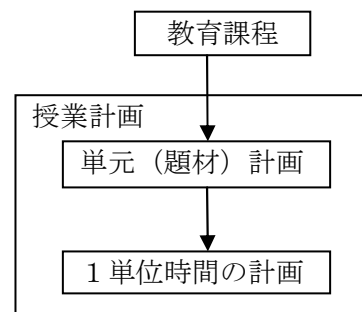
教師は、『よい授業』を実現するために日々研鑽していかなければなりません。学校では、学習指導が学校教育の大部分を占めていますので、学習指導を通しての人間形成が教師にとっての大切な仕事になってきます。そのためには、子どもとしっかり向き合い、子どもを温かく見守っていく姿勢を大切にしたいものです。



Q. 2 単元（題材）計画をどのように立てればよいのでしょうか。また、『単元（題材）の中の1単位時間』とは、どういう意味なのでしょうか。

A. 子どもたちは、授業を通して『わかる・できる』ことを求めています。そのために、教師は子どもたちの実態を把握し、教材研究を行い、学習展開を考えていきます。しかし、学習は『続きもの』です。児童生徒の興味・関心を喚起し、学習が持続できるようにするためにも、1時間ごとに内容が分断されるような授業ではなく、学びの連続があり、数時間のまとまりがある指導計画を立てていく必要があります。これが『単元（題材）※』の考え方です。

単元（題材）の指導計画を立て、その上で1単位時間の授業を構想するようにします。これが『単元（題材）の中の1単位時間』の意味するところです。



### ○単元（題材）計画作成の手順

最初に、「この単元（題材）を通して、子どもたちにどのような力を付けるのか」ということをしっかりおさえることが大切です。これが、単元（題材）目標になります。その際に、『学習指導要領（文部科学省）』、『同解説（同）』等を参考にするとういでしょう。

続いて、単元（題材）の指導計画を作成していきます。学習内容の配列（順序）を考えたり、配当する時間数を決めたりします。授業者の考え（指導観）を明確にすることが大切です。

指導計画に併せて、単元（題材）の評価計画を作成します。単元（題材）を通して『関心・意欲・態度』『思考・判断・表現』など、単元（題材）目標に準拠して、それぞれの観点（教科によって数や名称は異なる）に応じた評価をしていくようにします。また、1単位時間に全観点を評価することは不可能ですから、どの1時間にどの観点を評価するのかということについて、ねらいを明確にして配当することになります。この際には『評価規準の作成のための参考資料（国立教育政策研究所）』等を参考にしてください。【Q. 6、Q. 7参照】

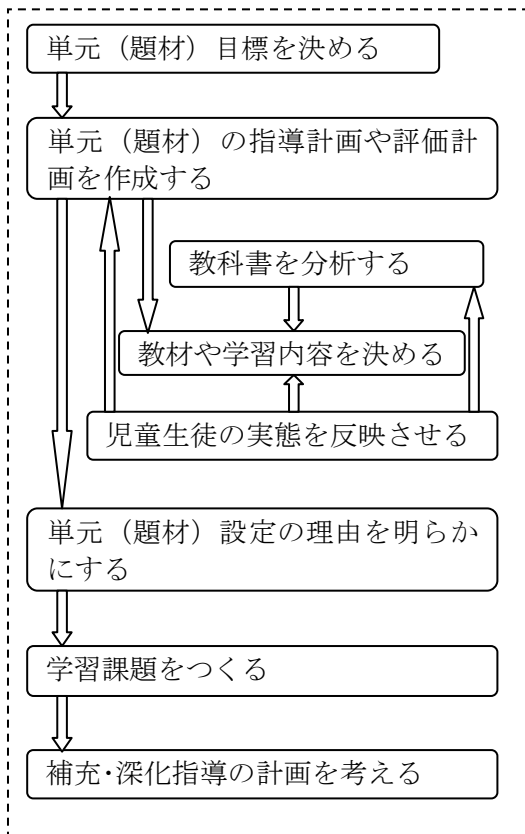
そして、学習内容や教材を考えていきます。学習指導要領に示された内容をもとに、児童生徒の実態等に応じて、補助的な教材を考えたり、過年度の学習事項を取り入れたりします。教科書の内容を分析することも大切です。

単元（題材）計画を綿密にしておくことで、1単位時間の計画も立てやすくなります。最初は目先の1時間の授業の計画を考えることで精一杯かもしれませんが、徐々に単元（題材）計画を考えるようにしましょう。また、単元（題材）の指導後には、初めに立てた計画を振り返り、次の単元（題材）計画の作成や次年度以降の指導に生かすことも大切です。

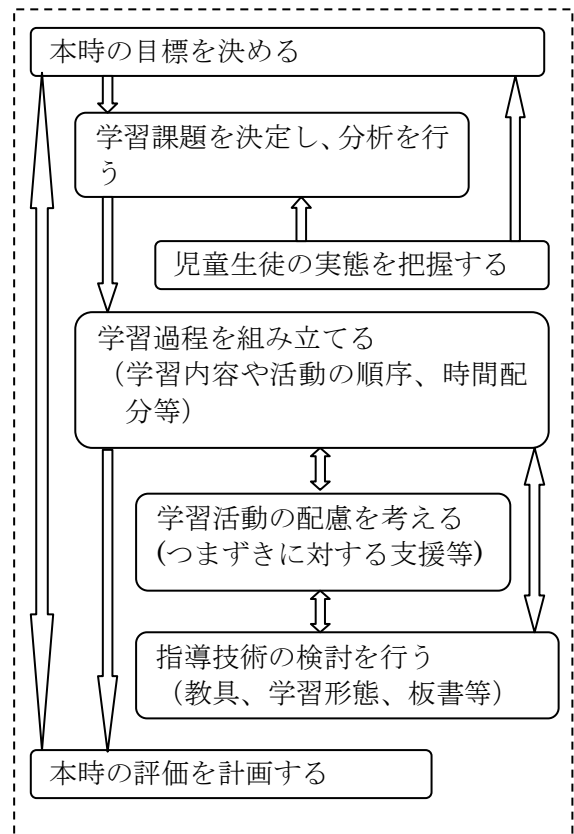
次ページに単元（題材）計画作成の手順例を図にまとめました。また、1単位時間の授業計画の作成手順例も併せて載せましたので、参考にしてください。

## ○作成の手順例

### ◇単元（題材）計画



### ◇1 単位時間の授業計画



(注：上の図は『わかる授業（中学校編）』p. 67～68 北九州市教育委員会指導部編 あらき書店を参考に作成した)

### 『題材』とは？

学習指導の内容を構成するまとまりとして、学習指導の目標や内容を組織付けた指導の単位であり、いくつかのねらいをもった活動のまとまりのことです。

※音楽、図画工作、美術、家庭科、技術・家庭科、芸術などの教科では、『単元』ではなく『題材』という用語を用います。【Q. 5 参照】



Q. 3 1 単位時間の指導過程を工夫したいと思っています。ポイントを教えてください。

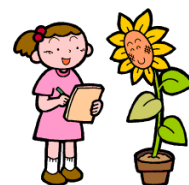
A. 学習指導過程は、児童生徒と教師、教材の三者が相互にかかわり合いながら動いていく授業の流れです。子どもたちが『わかる・できる』ように、指導過程やその具体の方法を工夫していくことが大切です。その際は、児童生徒の学習活動（学ぶこと）と教師の教授活動（教えること）のバランスを図り、教師の一方的な授業や子どもたちに任せっきりの授業にならないようにします。また、その時間で子どもに付ける力や学習のねらいを明確にして、導入・展開・終末の各段階を設けて、1 単位時間の授業を組み立てていきます。組み立てた指導過程を学習指導案に表すとよいでしょう。【Q. 5 参照】

### ○導入で学習課題をつかませる

学習することの必要性を感じられるようにし、わかっていないことをはっきりさせたり、予想を立てさせたりして、意欲付けを図るのが導入段階です。

そのためにはまず、本時のねらいに迫るための学習課題を教師が設定し、子どもたちに把握させていきます。教師が設定した課題が子ども自身の課題になることで、子どもたちの主体的な学習活動へつながるようにするのです。また、子どもたちの実態をとらえ、教材研究を深めることも必要です。【Q. 4 参照】

他に導入段階で、課題解決への見通しをもたせたり、学習の計画を立てさせたりすることがあります。



### ○展開で課題を解決させる

本時の中心となる段階です。考えを練り上げさせたり、新しい内容に出合わせたりしながら、課題を解決させていきます。

課題を解決し、「わかった!」「できた!」という自己解決の体験や成功感を味わわせるために、子どもの学習活動場面を計画します。その際、子どもたちに活動させることが目的にならないように気を付け、本時のねらいに迫るための学習活動を計画することが大切です。学習活動の例として、次のようなものがあります。

・見る活動	・きく活動	・書く活動	・話し合う活動
・動く活動	・つくる活動	・考える活動	・発表する活動
			……

事前に、子どもたちのつまづきを予想し、その対応を計画しておくことも大切なことです。また、子どもの誤答を取り上げ、新たな学習課題として展開させていくような工夫も考えられます。

本時における評価計画を立て、個に応じた指導や支援を行うようにします。

### ○終末で学習を定着・発展させる

終末は、その時間の学習を整理したり、学習したことを定着させたりする段階です。類似した問題や発展課題等に挑戦させたり、ノートまとめや自己評価など、学習の振り返りをさせたりします。家庭学習や次時の学習への橋渡しを行います。

授業が終わったら、よかった点やうまくいかなかったことを記録するなどして、次の授業構想の参考にしましょう。日々の実践が基本になります。

Q. 4 教材研究をする上で、気を付けることがありますか。

A. 教材研究をする際に留意することは、「何のために教えるのか？」という教材の『目的』を明確に把握することからスタートしましょう。そして、そのためには「何を教えなければならないか」という内容を把握していくことが必要になります。このことを曖昧にしていくと、学習のねらいが広がってしまい、子どもたちは何を学んでいるのかがわからなくなってしまいます。

『素材研究』『教材研究』『指導法研究』の3つがポイントとして挙げられます。

○まず『素材研究』をしよう！

『素材』とは『教材』以前の材料のことを指しています。子どもに教える目的を達成するためには、教師が素材と向き合い、その本質を理解し研究していくことが不可欠です。国語科でいえば、主人公は誰か？山場はどこか？この作品の魅力は何か？主題は何か？などについて『自分の言葉』で明解に書き出してみるとよいでしょう。こうした取組が素材を教材化していく力を養うことにつながります。

指導書や単行本の解に頼って『教え方』に心を向けるばかりでなく、自分の解をもつことにも心がけ、素材そのものから『学び、理解する』ことで教える方法を見出すようにしましょう。

○次に『教材研究』をしよう！

素材そのものの本質が理解できると「どんな力を付けさせるのか？」が見えてきます。『教材研究』とは、教える側が「教える材料としての研究を行う」という意味であり、その中核となるのが「この1時間で何を教えるのか」を具体的につかむことでもあります。そのためには、子どもの発達の段階に合わせて、『この学年で指導すべき内容』が示されている学習指導要領の指導事項との関連を押さえておくことが大切です。

学習指導要領の方針にしたがって編集されている教材集が教科書であり、その教科書の魅力を最大限に発揮するのが教師の指導力となります。「教科書教材をどのように扱えば、最も効率的に子どもの学力を育てることにつながるのか？」という観点から教材を研究していきましょう。

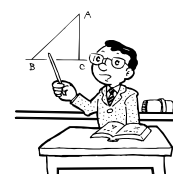
まずは、教科書に準拠した指導書等を参考にしながら実践していき、徐々に児童生徒の実態に応じて、自分で工夫しながら少しずつ授業を組み立てていけるように努力していきましょう。【Q. 15 参照】

○最後に『指導法研究』をしよう！

「何のために」「何を教えるのか」という事柄が理解できると、それを「どのように教えていくのか」について考えていくことになります。

とにかく、この『指導法研究』に大きな力を注ぎがちになりますが、子どもと直接かかわらない部分にどれだけ力を蓄えているかということが、授業の軽重や深淺を位置付けるといっても過言ではありません。『素材研究』

『教材研究』をしっかりと行った上で、発問や指示、板書、演示、説明などの内容や指導法を十分に吟味するようにしましょう。



Q. 5 学習指導案には、どのような内容を示したらよいのでしょうか。

A. 学習指導案の様式には、定められたものがあるわけではありません。

一般的には、①単元（題材）名、②単元（題材）の目標、③単元（題材）設定の理由（児童（生徒）観、指導観など）、④指導計画（評価計画を含む）、⑤本時の目標、⑥本時の展開（評価を含む）⑦その他・資料の7つの項目で構成されていることが多いようです。しかし、学校研究のテーマに沿って、独自の様式で作成する場合がありますので、この限りではありません。

本時の展開については、『導入・展開・終末』を指導段階（学習段階）として表記することが多く見られます。



### ○単元（題材）の構成に関すること

単元（題材）名や目標、設定の理由については、具体的な内容を記載するようにしましょう。

題材名は、『生き生きとしたリズムを生かして歌おう』（音楽科）のように、内容と活動がはっきりとイメージできるものにし、題材の目標と関連付けて設定することが大切です。

単元（題材）の設定理由については、事前に『児童生徒の実態把握』『素材研究による教材化』を綿密に行い、単元（題材）の目標に記した、子どもたちに身に付けさせたい力と関連させながら記述していくことが肝要です。また、『児童生徒の実態把握』については、その単元（題材）に関する実態を書き記すことが必要です。

### ○指導計画（評価計画を含む）

指導計画とは、指導目標を達成するために指導すべき内容をどのように配列し構成するかを計画したものです。項目については、以下に示す事例のように『ねらい』『学習内容と学習活動』『評価』『評価方法』などが考えられます。

子どもの思考の流れを想定しながら計画していくことがポイントです。

【Q. 2、Q. 7 参照】

#### 〈事例1：小学校音楽科〉

次	時	ねらい	○学習内容 ・学習活動	評価【観点】	評価方法
1	1	○○○○○	○ △△△△△する。 ・ □□□に着目して聴く。	【関・意・態】 ○○～	観察 発言の内容
2	1	問いと答えによる仕組みを生かしながら、強弱を手がかりにして、曲想にふさわしい歌い方を工夫することができるようにする。	○ 『とんび』の歌詞の表す様子を生かしながら、曲想にふさわしい表現を工夫する。 ・ とんびの様子からイメージしたことをグループで共有する。（前時のワークシートを参考にする。） ・ 第3フレーズの『ピンヨロ』の問いと答えの部分に着目し、どのようなとんびの様子が表現されているかを考える。 ・ 各自が考えた様子をグループで共有し、どのように歌うとよいかについて、強弱を手がかりにしながら表現を工夫する。 ・ 学習した表現を生かして、みんなで『とんび』を歌う。 ○ 学習の振り返りをする。	【音楽表現の創意工夫】 問いと答えの仕組みを聴き取り、その働きによって生み出される曲想を感じ取り、強弱を手がかりにしながら思いや意図をもって歌唱表現を工夫している。	発言の内容 楽譜への書込み 演奏の聴取 ワークシートの記述

## ○本時のねらいと展開

現在の子どもの実態から、取り組ませる学習活動や身に付けさせたい力などについて記述します。1時間の学習を充実したものにするためには、その時間の指導のねらいを明確にしておく必要があります。

学習の展開には、『学習活動』と『予想される児童生徒の反応』を記述します。また、学習の各場面における指導や助言、そして評価の観点が具体的に示されることによって、指導の細部が明らかになってきます。その際、学習の流れが明確でわかりやすいこと、学習活動と児童生徒の意識、指導内容が無理なく位置付いていることが重要です。



### 〈事例2：小学校音楽科〉

#### ※本時のねらい

問いと答えによる仕組みを生かしながら、強弱を手がかりにして、曲想にふさわしい歌い方を工夫することができるようにする。

教科によっては、文末表現が『できる』という表記になる場合があります。

#### 段階

つかむ・さぐる・まとめる、ふかめるといった表現もよいでしょう。

#### 予想される児童（生徒）の反応

教師が子どもの学習意識の流れを予想して試みた展開に対し、子どもはどんな反応を示し、どんな追究をしていくかを考え記述します。「……するだろう」と予測した記述や「～だなあ」「～しよう」など、考えや発言、つぶやき、意識などを記します。本時の学習の鍵になる考えや意識などを記入することも考えられます。

段階	学習活動 ◇予想される児童の反応	教師の支援	評価規準と方法
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問いと答えが生かされた手遊び歌で音楽遊びをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・強弱を取り入れた発展的な音楽遊びができるように支援する。</li> </ul>	
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のめあてを知る。 とんびが飛んでいる様子を歌って表現しよう!</li> <li>・とんびの様子からイメージしたことについてグループで共有する。(前時のワークシート参照)</li> <li>・第3フレーズの『ピンヨロ』の問いと答えの部分について、強弱を手がかりにしながらどのように歌いたいかについてワークシートに記入し、内容をグループで共有する。</li> <li>・第3フレーズの歌い方をグループで工夫する。 例) ◇「呼びかけ合っている感じがするから、1小節ごとに <b>f</b>、<b>p</b>、<b>f</b>、<b>p</b> で歌おう」 ◇「とんびが鳴きながら近付いてきて、過ぎ去っていく様子を表したいから、前半2小節は <b>f</b> で、後半2小節は <b>p</b> で歌おう」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・めあてと1時間の授業の流れを黒板に提示する。</li> <li>・似たようなイメージについては、なるべく具体的な内容にして伝えさせる。</li> <li>・活動に取りかかりやすいように、例を示す。 (例：呼びかけ合う様子の場合)</li> <li>・意図とする表現に近付いているかを確認させる。</li> <li>・必要に応じて技術面の指導を行う。</li> </ul>	<p>【評価規準】 問いと答えの仕組みを聴き取り、その働きによって生み出される曲想を感じ取り、強弱を手がかりにしながら思いや意図をもって歌唱表現を工夫している。</p> <p>【評価方法】 発言の内容 楽譜への書き込み 演奏の聴取 ワークシートの記述</p>

#### 学習活動

この時間に、どのような活動を通して、何に気付き、何を追究するのかを簡潔に子どもの姿で記述します。さらに、『学習場面の設定』や『学習形態』についても配慮しましょう。

#### 教師の支援

学習活動に対する子どものつまづきを想定して、示範や助言、発問、指名による子どもへの指導や支援方法をあらかじめ考えて用意しておきます。

#### 評価

1時間の学習を振り返り、「本時のねらいが達成されているか？」という視点で評価しましょう。評価規準は、各教科等の特性を生かした表記を参考にし、評価方法も記述します。



Q. 6 児童生徒の学習状況を評価するときに注意しておくことがありますか。

A. 各教科等の学習指導では、子どもの学習状況を分析的にとらえる観点別学習状況による評価が行われており、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況の評価する『目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）』として実施することが基本です。この評価は、あらかじめ目標を分析して設定した評価規準によって、目標がどの程度達成されたかを検討するものです。

評価というと、指導後の子どもの状況を記録するためのみに行うものにとらえられがちですが、指導の段階に応じて子どもの学習状況を適切に評価することで、教師が自分自身の授業の進め方を見直したり、個に応じた指導の充実を図ったりすることが大切なのです。

また、評価は、子どもが自分の学習を見つめ直し、その後の学習に役立てたり、保護者が子どもの学習状況を把握することで、家庭での学習を促したりする契機となります。そのためには、学習評価に関する妥当性や信頼性を高め、説明責任を果たすことが重要です。



### ○学習評価の種類

評価は、実施の時期によって3種類に分けられます。何のために評価を行うのか、その目的を明確にしておきましょう。

#### ◇診断的評価

診断的評価とは、一人一人の子どもに適した指導を行うために、指導前に子どもの状況を把握することです。学習の前提要因となる基礎的な知識・技能が備わっているのか、学習内容に関する興味・関心の傾向はどうかなどを調べることで、単元（題材）の指導計画作成や授業構想の資料とします。

#### ◇形成的評価

形成的評価とは、学習の指導過程において学習の達成度を評価することです。この形成的評価を受けて学習活動と指導方法の軌道修正を行います。授業中の子どもの様子を見取って適切な言葉かけをしたり、授業の進め方を修正したり、さらには補充指導を行ったりすることは、形成的評価と指導が一体的に進められている例と言えます。

単元（題材）の途中にも形成的評価を取り入れ、それに続く指導の改善と個別の支援に生かしましょう。

#### ◇総括的評価

総括的評価は、指導後のまとめとして行います。単元（題材）、学期や学年ごとの学習を総合的に評価し、以降の学習や指導に役立てます。

### ○指導と評価の一体化

学習指導と学習評価は、指導計画等の作成（Plan）、指導計画を踏まえた指導の実施（Do）、児童生徒の学習状況や指導計画等の評価（Check）、授業内容や指導計画等の改善（Action）が、PDCAサイクルで繰り返し行われることが重要です。このサイクルを機能させていくことが、指導目標の実現には欠かせません。指導と評価の一体化を図るためには、評価の場面・方法や時期を工夫するとともに、評価結果を学習指導の工夫・改善に生かすことが大切です。

Q. 7 学習評価の具体的な方法について、教えてください。

A. 学習評価は、場面や学習内容に応じて、いくつかの方法を用いて行います。例えば、授業中であれば生徒の発言や行動に対して評価言を返すことや、机間指導の際に子どものノートやワークシートの記入状況を見て、支援とともにチェックや印を入れて評価を行うことができます。あるいは、授業後にはノートやワークシートを集め、コメントを付けて返すことで、その学習の評価を子どもに伝えることもできます。このように、いくつかの方法を用いて多面的に評価することが大切です。どの場面で、どんな方法で評価するのか、あらかじめ計画を立てておくといよいでしょう。以下に、主な評価方法を挙げましたので、参考にしてください。

## ○主な評価方法

### ◇観察法

教師があらゆる学習場面において、子どもの活動状況や態度を観察することです。この観察は評価にとって重要な資料となります。例えば、家庭科の調理実習で、『関心・意欲・態度』を子どもの行動観察で評価するとします。評価規準を「見本を見ながら、材料を適切な大きさに切ろうとしている」と設定したならば、材料を切るといふ子どもの行動を観察し、評価規準に照らしてその状況の評価することになります。

ただ、評価するための観察に追われて適切な指導ができないようなことがあつては、何のために評価をしているかわからなくなってしまうます。評価すべき行動や状態をあらかじめ規定しておくことや、子どもの行動を予測して、つまりきに対応できるようにしておくことが大切です。

### ◇自己評価

評価の対象者となる子ども自身が、評価の主体となって自分の学習を振り返ることをいいます。学んだ事柄を自ら評価することで主体的な学習を促します。

子どもは、教師が自分を受け入れてくれるという思いがなければ、自己評価で自ら思ったことや気付いたことを素直に表現することは難しいでしょう。教師に子どもの素直な気持ちを受けとめる余裕や公平さが求められます。

また、子どもが否定的な自己評価をした場合でも、教師は、認めたり、励ましたりして次の学びにつながる自己評価としたいものです。子どもと教師の良好な人間関係があつてこそ、適切な自己評価につながると言えます。

### ◇相互評価

相互評価とは、子ども同士が互いを評価し合うことです。ここで大切なのは、互いに信頼し、認め合っている関係の中でこそ、相互評価が成立するということを子どもにも周知させておくことが大切です。

### ◇パフォーマンス評価

パフォーマンス評価は、一般的には、習得した知識・技能を使いこなす能力を評価することです。評価の方法には、日常的な観察や対話による評価、自由記述式の問題による筆記テストや実技テストによる評価、パフォーマンス課題（完成作品や実演）による評価などが含まれます。

なお、『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』（平成22年3月24日、

中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会) には、パフォーマンス評価について、次のように記されています。

思考力・判断力・表現力等の評価するに当たって、『パフォーマンス評価』に取り組んでいる例も見られる。パフォーマンス評価とは、様々な学習活動の部分的な評価や実技の評価をするという単純なものから、レポートの作成や口頭発表等により評価するという複雑なものまでを意味している。または、それら筆記と実演を組み合わせたプロジェクトを通じて評価を行うことを指す場合もある。

#### ◇ポートフォリオ評価

ポートフォリオとは、子どもの学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集めたものです。このポートフォリオを用いて、学びのプロセスや成果を長期的に評価します。子どもの自己評価を尊重しながら、子ども同士の相互評価や教師のコメントなども加えながら多面的に評価します。長期の指導計画を実施する際や、思考力・判断力・表現力のような長期間かけてはぐくまれる能力の評価には有効な評価方法の1つです。

#### ◇ペーパーテスト（教師自作テスト）

教師が子どもの学習の実態を的確にとらえ、効果的な指導をするために作成するテストです。単元（題材）ごとや1単位時間ごとに行う小テストと、期末テストなどの定期テストがあります。

自作テストの作成にあたっては、次のことに留意しましょう。

- \* 学習内容と密接に関連した問題を出題し、目標がどの程度達成されているかを把握する。
- \* 4観点との関連を明確にした問題を作成し、評価すべき学習状況や観点に合わせた解答方法の工夫をする。



また、テストの結果をもとに、次の授業改善に結び付けていくことが重要です。

### ○単元（題材）における評価で注意すること

#### ◇単元（題材）目標と評価規準の設定

単元（題材）目標は、その単元（題材）の学習活動を通じて子どもたちに身に付けさせようとしている資質や能力を明確にするために、観点別に設定します。（教科によってはこの限りではありません。）各教科等の学習指導要領解説をしっかりと読み、児童生徒の実態把握のための診断的評価を取り入れ、適切な目標を設定しましょう。そして、目標の実現状況を判断する評価規準を設定します。

#### ◇指導計画と評価計画の作成

単元（題材）の指導計画を作成する際には、学習活動が目標達成につながる展開になるよう組み立てます。ここでも、診断的評価を取り入れるとよいでしょう。また、指導と評価の一体化を図るために、評価の計画を位置付けることが大切です。目標に設定した各観点について、単元（題材）のどこで評価するのか、評価する場面と評価規準、方法を明確にします。

その際、児童生徒のどのような姿が『おおむね満足できる』状況なのか、『十分満足できる』状況なのかを具体的にしておきましょう。さらに『おおむね満足できる』状況に至らない子どもがいた場合の手立てについても想定します。評価規準を作成する際は、国立教育政策研究所作成の『評価規準の作成のための参考資料』に示された『内容のまとめりととの評価規準に盛り込むべき事項及び評価

規準の設定例』を参考にするとよいでしょう。【Q. 2 参照】

#### ◇授業の中で評価する

授業では、指導と評価の一体化を図ることが大切です。〔形成的評価〕

評価計画に基づいて意図的、計画的に子どもの学習を評価するとともに、子どものさまざまな反応や評価結果に柔軟に対応し、支援に生かしましょう。また、評価の妥当性や信頼性を保つために、授業中の子どもの様子を記録に残すことも大切です。

#### ◇単元（題材）の評価の総括

1つの単元（題材）が終わると、一人一人の観点別学習状況をまとめます。あらかじめ作成した評価規準に照らして、授業の記録やテストやレポートなどの学習成果をもとに評価します。〔総括的評価〕

単元（題材）ごとの総括的評価は、学期末の総括的な評価・評定に生かされます。また、この評価をもとに、指導計画を練り直したり、評価計画を見直したりすることも必要です。

#### 学力の要素と4観点

学校教育法及び学習指導要領の総則においては、

- ①基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③主体的に学習に取り組む態度



を育成することが示されています。これらの学力の要素を踏まえて、評価の観点は『関心・意欲・態度』『思考・判断・表現』『技能』『知識・理解』の4つの観点に整理されました。

\*各教科等の評価の観点はこれらを基本としつつ、各教科等の特性に応じて設定されています。

#### 各観点の評価に関する考え方

『関心・意欲・態度』

各教科が対象としている学習内容に関心をもち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童生徒が身に付けているかどうかを評価します。

『思考・判断・表現』

それぞれの教科の知識・技能を活用して課題を解決すること等のために必要な思考力・判断力・表現力等を児童生徒が身に付けているかどうかを評価します。

『技能』

各教科において習得すべき技能を児童生徒が身に付けているかどうかを評価します。

『知識・理解』

各教科において習得すべき知識や重要な概念等を児童生徒が理解しているかどうかを評価します。

#### 評定

評定は、各教科における児童生徒の学習状況を総括的にとらえるもので、小学校（第3学年以上）は3段階で、中学校と高等学校は5段階で評価します。各単元（題材）で総括した観点別評価の結果を、学期末や学年末に総括し、通信簿や指導要録に記載します。

Q. 8 『よい授業』をするための指導技術にはどのようなものがありますか。

A. 『よい授業』には効果的な指導技術が不可欠です。その多くは、どの教科でも共通して使えるものです。この指導技術は、年数が経てば自然に身に付くものではなく、日々の授業実践を振り返りながら、少しずつ磨いていくものです。他の教師の授業を見て、「うまい指導だな」と思える場面に出合うことがあるでしょう。よい方法だと思えば早速自分の授業でも取り入れてみたり、自分で独自に考えて実践したりして、試行錯誤を繰り返しながら自分なりの指導技術を身に付けていくことが大切です。

### ○基本的な指導技術

指導技術は多岐にわたりますが、本書では次のようなものを想定しています。

- |                |           |
|----------------|-----------|
| ○教師の話し方        | ○発問       |
| ○話し合い活動や聞き方の指導 | ○指名       |
| ○机間指導          | ○板書やノート指導 |
| ○教科書や教具の活用     | ○学習形態の工夫  |
| ○ほめ方や叱り方       | ○教具の活用 など |

この中のいくつかについて、【Q. 9～16】で紹介しています。



### ○教師の言動

私たちは、表情を変えたり、身振り手振りなど身体を動かしたりして、話すことが多いものです。このことも有効な技術になる場合があります。話の内容や状況に応じて話し方や表情を変えることで、子どもたちへの伝わり方が違ってきます。

また、授業中どこを見て話すのか（視点の置き方）、どこに立つのか（立ち位置）を考えたり、子どもの理解度を確認するために目配りをしたりすることも重要な技術です。【Q. 10 参照】

### ○教師の姿勢

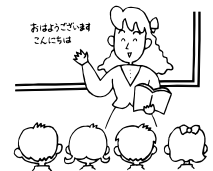
授業技術以前の問題として、指導者としての姿勢が問われます。例えば、次のような項目について、絶えず自分自身を振り返り、指導に当たる必要があります。

- \* ふるまいや服装などに、子どもたちが授業に集中するのを妨げるものはないか。
- \* 子どもたち一人一人に対して、正しく公平に接しているか。
- \* 児童生徒を一人の人間として尊重し、子どもたちの声に耳を傾けているか。

さらに、子どもたちとの信頼関係を築くことも大切です。子どもたちとの心のつながりが授業成立の大きな土台となるのは言うまでもありません。そのためにも、子どもたちから信頼され、理解される教師を目指したいものです。平素から、授業以外の場面でもよりよい関係づくりを心がけましょう。

Q. 9 教師の話し方で留意することは何ですか。

A. 教師が子どもたちに何かを話したり、指示を出したりすることは、とても大切な指導技術の1つです。場面に応じた『声の大きさ』『目線』『場面をイメージできる話の構成』の3つを心がけましょう。この3つのことに併せて、子どもたちにとって納得できる内容を考え、伝えていくことがポイントになります。その場合、話し手の顔の表情や語尾の言い回しなどによっても、相手に伝わる印象が異なることに留意しましょう。



○声の大きさ

子どもに問いかける声の大きさは、状況に応じて使い分けることがポイントになります。『指示』は、皆に気付かせるようにするために、はっきりと通る『大』の声で行い、子どもの説明に対して補足を入れるなど、考えをより深めさせる場合は『中』の声を使います。そして、個別指導の時は『小』の声で子どもに寄り添うような声かけをするように心がけましょう。

声の出し方には『強弱』とともに『高低』や『速さ』も加味しながら、聞き手を意識した話し方を身に付けましょう。【Q. 11 参照】

○目線

子どもたちにしっかりと話の内容を理解させたい時は、教師自身が背筋を伸ばし、凛とした態度で伝えたいものです。それは、子どもたちの目線が少し上に向くようにするための配慮の1つです。

授業における個人指導等の場面では、子どもが安心して「わからない」と言えるようにするために、子どもと同じ目線にするようにしましょう。そして、話しにくそうにしている子どもの思いを聞きたい時は、指導者の目線を子どもの目線より少し低くしてみることもポイントの1つです。

しかし、目線を配るという指導技術のみにこだわるのではなく、日々のかかわりを通して、子ども一人一人や学級全体の状態を見ながら実践していくことは言うまでもありません。

○場面をイメージできるような話の構成

教師が子どもに話をする場合、何気なく話をしたり、支離滅裂な話をしたりするなど、教師の思いのみで話を進めてしまうことがあります。この場合、話の内容は何となく伝わりますが、より深く子どもの心の中に伝わっていくことは期待できません。

子どもたちも大人も自分のイメージをもつと、適切な行動ができたり、しっかりと自分の意思で考えたりすることができるようになります。

そのためには、時系列で話をすることや、『状況』を表す言葉を入れることが大切になるでしょう。例えば、「正門の前は、大きな道路でたくさん車が来ているよね。だから、下校の時に急いで正門を出ると、どうなるのかな？」と問いかけをします。このように、意識してわかりやすく伝えようとすることで、子どもへの話し方が変わっていくことでしょう。そのことが子どもにとっての『話し方のモデル』にもなります。【Q. 17 参照】

1日の教育活動の中で、『話すこと』を通して児童生徒に様々な内容を伝える機会が多くあります。時には、注意等を促す場面もあるでしょう。その時に、「この内容は全体で話すことが適切なのか？」や「違う場所で個別に対応することが必要か？」など、場面や状況を十分に見極めて話すことが大切です。



### 『きく』ことの大切さ

教師は、授業や諸活動を通して、子どもの思いや考えを『きく場面』が多くあります。ともすれば、自分本位の『きき方』になってしまうことで、子どもの本音をつかみ損ねてしまうこともあるのではないのでしょうか。



話し方に併せて、『きき方』についても振り返ってみましょう。

### 三つの『きく』

- ①聞く (hear) 受動的受信＝聞こえてくる音を聞く
- ②聴く (listen) 主体的受信＝注意深く聞く、傾聴する、判断する
- ③訊く (ask) 主動的受信＝たずねる、確かめる、インタビューする

### 受けとめ、うなずき、受け入れる

#### ○優れた聞き手が、優れた話し手を育てる

話をきく時には、受容的な態度をとることが大切です。内心では「それは違うのではないか」と思っても、すぐに反論したりせずに、まずは受けとめ、うなずいて話の内容を受け入れることが大切です。その際には、相手が何を言おうとしているかを汲み取るようにしましょう。

話し手が「この人は、私の話を真剣に聞いてくれている！」と受容されているように感じると、話し手は、安心して言葉を続けることができます。そして、安心して思いのたけを語ることによって、自分の気持ちに気付いたり、新たな視点で物事を考えたりすることができるものです。そういった意味からすると、話の内容をどれほど深めていけるかは、聞き手の技量によるところが大きいと言えます。

#### ○子どもの話はすぐに否定しない

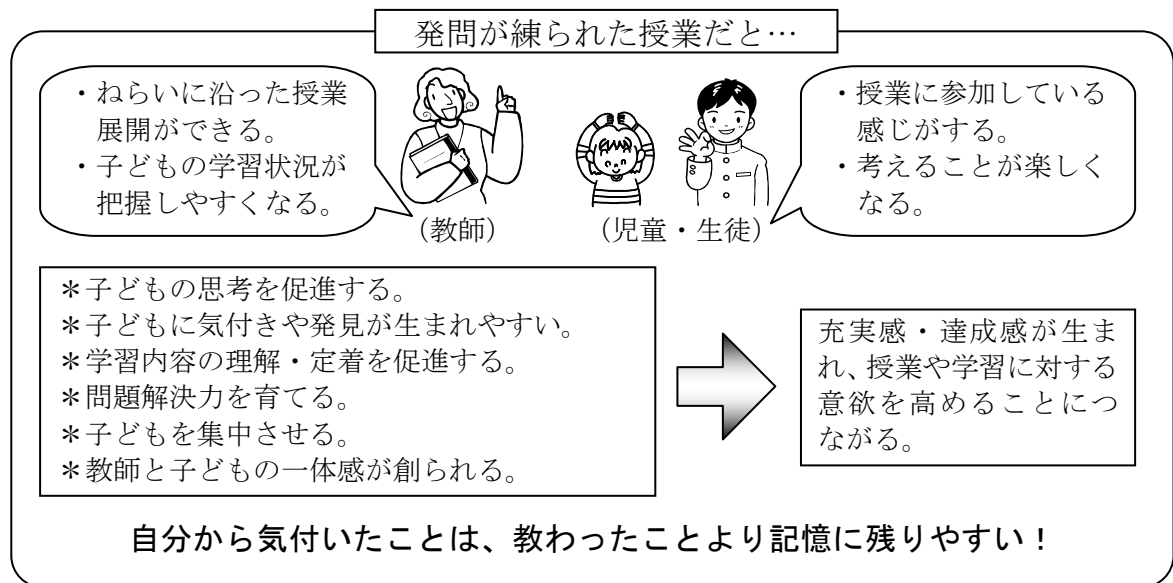
相手を受容するという基本は、当然ながら、子どもを指導するときにも当てはまります。子どもを諭すとき、感情的な反発が残るようでは、指導が成功したとは言えません。いくら正論を展開しても、自分の思いや考えを撥ねつけられたら、説得は失敗に終わってしまいます。頭ごなしに指導するのではなく、子どもの言い分を一旦受け入れ、内面で十分に吟味することが大切です。

このような教師の姿勢が、子どもにとっての『きき方』の手本となるでしょう。

Q. 10 発問がよくないためか、子どもたちからうまく意見を引き出すことができません。発問をする際に気を付けることは何ですか。

A. 発問とは、授業中に教師が行う意図的な問いかけ（指導言）のことをいい、授業構成の核となる非常に重要な指導技術です。十分な教材研究や板書計画に合わせて、学級の実態に応じた発問を考えることが、子どものより深い思考を促し、自分なりの考えをつくり出す手だてとなります。

以下は、『発問が練られた授業』を展開した場合のイメージ図です。



### ○発問によって思考力を育てる

実際の授業において、教師の一方的な説明や指示の時間が多くなり過ぎると、子どもたちが考える場面がなくなってしまう授業が上手くいきません。このことを改善していくには、子どもの思考に合わせた発問を投げかけることが大切です。子どもが学習課題について考えたり、友だちの考えと自分の考えを比べてみたりするなど、学習場面に応じた発問を展開していきながら考える力を育てていくようにしましょう。

### ○『閉じた発問』と『開いた発問』

一般的に発問は、『閉じた発問』と『開いた発問』があるとされています。

閉じた発問とは、YES か NO で答えられるものか、答えが1つしかないものです。閉じた発問は、開いた発問の前段階として用いると有効で、授業にリズムやテンポを生み出すことができます。しかし、閉じた発問だけでは、子どもたちの思考力を刺激するものにはならず、授業が単調なものになってしまいます。

例えば、次の2つの発問例を比較してみてください。

- ① 草食動物の目は、顔のどこについていますか？
- ② 草食動物の目が顔の横についているのは、なぜだと思いますか？

①は、閉じた発問の一例で、答えは「横か前についている」であり、覚えていなくても答えることができます。②は、開いた発問であり、草食動物が生きていく環境について考えなければならない問いとなっています。



このような問いを働きかけることによって、子どもたちは、肉食動物と草食動物との関係を思い浮かべ、草食動物の生活環境を想像しながら答えを考えることとなります。

## ○効果的な発問づくりのポイント

### ◇ねらいに即して発問を使い分ける

発問を考える際に気を付けたいことは、「ねらいに対して何に気付かせ、何を考えさせるのか」ということです。

以下に挙げる7つの例について、教材や授業展開に応じた発問を取り入れながら、子どもの主体性や学習意欲を引き出すようにしましょう。

\* 本時の課題解決に必要な既習内容に気付かせる

例) 「形容詞って、どんな働きをするのかな？」

\* 根拠を明らかにする

例) 「なぜそう思ったの?」「どのように考えたの?」

\* 相違点や類似点を明らかにする

例) 「どこが同じで、どこが違うかな?」「何に似ていると思ったの?」

\* 思考作業のプロセスを確認する

例) 「どうやって解いたの?」「どんな式を立てたの?」

\* 解決の糸口を見つける

例) 「どうなれば良いと思うのかな?」「どうなれば解けそう?」

\* 解く手順を定着させる

例) 「まず何をするのかな?」「次は、どのようなことが考えられるかな?」

\* 理解の確認

例) 「ここの部分を、先生が今言ったように説明してみて?」

### ◇ねらいを明確にして、応答を予測する

授業の核となる『思考を深める発問』については、本時のねらいに迫るものであることが不可欠です。言い換えれば、ねらいが定まっていなければ、子どもの思考が深まらずに、表面的な議論で終わってしまうということです。

そのためには、「この発問をしたら、子どもはどのように考えるだろうか」「この発問に対して、どのような回答が出てくるだろうか」などと事前に検討しておくことが大切です。また、予想した回答を「どのような順序で取り上げていくか」ということも考えておくことが必要でしょう。



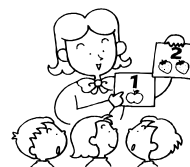
### ◇子どもの実態に合わせる

よい発問をつくっても、子どもの実態に合ったものでなければ期待した授業展開にはなりません。例えば、課題の内容を高く設定した発問では、一部の子どもだけの議論になってしまったり、その逆であれば、進んでいる子どもの意欲が低下したりすることにもなりかねません。

ポイントとしては、事前に子どもの興味・関心や考え方の傾向を把握したり、子どもの既習事項や内容を確認したりするなどの準備をして、発問を構想していくことが大切です。また、発問後は個々の子どもの様子を観察するために、机間指導などの支援を行うことにも配慮しましょう。【Q.12 参照】

### ◇子どもが自ら疑問をもつよう教材や教具を工夫する

子どもの思考を発展させるためには、発問だけではなく、教材や教具を工夫することも大切です。例えば、絵や写真のように伝えたい内容の具体物をはっきりと提示することで、子どもの驚きや疑問が生まれ、そのことが学習課題となる場合もあります。また、発問と併せて用いることで、子どもの思考をより一層深めることにもなります。



### ◇発問を吟味する

子どもの思考を妨げたり、子どもの思いや存在を軽視したりするような発問には気を付けたいものです。

#### \* 矢継ぎ早に問いかける閉じた発問

例)「登場人物はどんな気持ちだったのかな?」「うれしかったのかな? 悲しかったのかな?」「なぜ、そのような気持ちになったのかな?」というように次々と発問を投げかけることは、子どもの思考を妨げてしまいます。発問を構成する際は、子どもの実態を考慮し、言葉を厳選して、明確な意図をもって問いかけましょう。

#### \* 答えを言ってしまう発問

例)「さっき聴いた音楽は、だんだん音が大きくなって迫力があつたよね! みんなはどのように感じたかな?」のように、教師が意図とする答えや感想を含んだ発問は、子どもの思考を促すことにはつながりません。例えば、「さっき聴いた音楽は、音がどのように変化したかな?そしてどのように感じたかな?」というように、発問を換えて問いかけることが必要でしょう。

#### \* ヒントが具体的過ぎて、作業のようになってしまう発問

例)「抜き出しの答えは、10行目から12行目です。わかった人は手を挙げて!」のような発問は、出すヒントの範囲を限定し過ぎて、子どもたちは作業的な活動になってしまいます。

#### \* 子どもの思いや存在を無視した発問

例)「今日はリコーダーで△△△△を演奏しますよ! ○○さん、今日の授業では何をやるの?」など、必要とする学習場面を除いては、あまり単純な発問や脈略を無視した発問は避けましょう。

### ○学習基盤の大切さ

子どもが主体的に取り組む授業展開を考えたときに大切にしたいことは、誰もが発言したくなるような環境を整えることです。一部の子どもによる発言ばかりが取り上げられる授業では、子どものつぶやきや自由な発言が制限されてしまい、多様な意見が共有されにくくなります。

子ども一人一人の思いが学級全体で共有され、安心して発言できるような環境を整えるよう、日頃から子どもたちの様子に目を配ることも重要なことです。



Q. 11 話し合いを取り入れた授業を構想しています。どんなことに気を付けて指導をしていけばよいのでしょうか。

A. 話し合いは、1つの課題について、いろいろな意見を出し合い、友だち同士で探究していく学習活動です。個人で考えていたことを互いに発表し合いながら、自身の考えをより深めていくことができるため、学力の形成にたいへん有効な学習方法とも言えます。しかし、実際の授業では、子どもたち同士の話し合いがなかなかうまくいかないものです。子どもが話し合うことに慣れていないことや、教師が話し合いを取り入れた授業に慣れていないということが理由に挙げられます。話し合いの進め方や聞き方、話し方などについての基本的な指導が必要になります。

### ○話し合いで育てる力

学習指導要領解説には「各教科・科目等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、(中略)言語活動を充実すること」(高等学校総則編 p. 70、中学校同 p. 52、小学校同 p. 52)とあります。

これは、言葉の力を高めると同時に、感性・情緒の基盤、コミュニケーションの基盤、知的活動の基盤として、すべての教科等で言語活動を進めていくことが求められていることを示しています。子どもにどんな力を付けるのかを明確にして、話し合いなどの言語活動を取り入れるようにしなければならないということです。

実際に、子どもは発表しながら、自分の考えを整理したり、友だちの意見を聞きながら、自分の考えとの違いに気付いたり、自分の考えを修正したり、新しい考えを発見したりといった活動を行っていきます。この学習過程が、思考力や表現力を育てることにつながっていくのです。

### ○話し方(説明・発表)や話し合いの進め方の指導

横浜国立大学附属横浜中学校では、どの教室にも下の枠内に示すような話型を掲示し、すべての教科等の授業場面で活用しています。多くの小学校でも同じような取組を行っていますが、中学校や高等学校でも参考になる実践です。学級全体での話し合いの場面だけでなく、小集団(グループ)での話し合い場面にも活用できます。

- 比較や分類(差異点、相違点、共通点、類似点)  
「同じ点は……で、違う点は……です。」  
「……と……は、…なところが似ていると思います。」
- 関連付け・関係付け  
「……に関連することとして……が挙げられます。」  
「……と……は関係付けることができます。」
- 規則性  
「……の結果から、……のような規則性を見いだせます。」 (以下略)

結論を先に言わせたり、考えた根拠を発表させたりすることも重要です。

型にはまった話し合いを求めるのではなく、話し合いを促すための方法を考えることがポイントです。

話し合いの場面では、子どもが司会をすることもあるため、子どもたちと話し合いのルールを決めておくこともよいでしょう。場合によっては、教師が子どもたちに話し合いを仕掛けたり、コーディネートしたりすることも必要になります。

## ○聞き方の指導

話し合いを上手に行う上で、聞き手を育てていくことも大切です。例えば、メモを取りながら話の要点を聞くこと、説明と質問を聞き分けること、話し手の気持ちを汲み取ること、自分の考えと比べながら聞くことなど段階に応じた指導をしていくようにします。

## ○話し合いの内容の吟味と指示の仕方

「今から何を話し合うの？」と子どもに聞かれることがあります。話し合いのねらいはもちろんのこと、話し合う内容を吟味する必要があります。特別に話し合わなくてもすぐに課題解決できるような内容について、延々と話し合わせてしまうことのないよう気を付けましょう。

また、何分くらい話し合うのかといった時間の設定、学級全体で話し合うのか、グループで意見を出し合うのかなど話し合いの形態について、明確に指示することが必要です。【Q.16 参照】

## ○発言の取り上げ方

話し合った結果を次の学習活動に生かすことが大切です。そのために、グループでの話し合いで出てきた課題を学級全体で再度考えたり、各自でノートにまとめさせたりするなどの展開の工夫を行っていきます。ここでは、話し合いで出た意見を教師がどう受けとめるのかが重要です。教師にとって都合のよい意見だけを取り上げることをないようにしましょう。

また逆に、意見を自由に出し合わせて終了になってしまう授業もあります。ある児童生徒の意見に対して、他の子はどう思っているのかを問うたり、同じような意見を求めたりして、子どもたち同士話し合いを上手にコーディネートするのも教師の役割です。

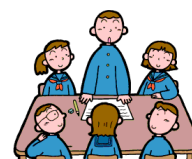
子どもたちの話し合いを進めるためには、まず教師自身が聞き上手になりましょう。

【コラム(p.15)参照】

この項目については、『教員研修の手引』（島根県教育委員会）の学習指導のページも参考になります。

## ○話し合いの基盤づくり

自由に意見を言い合え、間違いが認められるような学級の雰囲気が話し合い活動の成立の絶対条件でしょう。「あの子は気に入らないから反対してやろう」といった気持ちの子がいれば、話し合いは成り立ちません。また、自信がもてなくて、「間違ったことを言うとみんなから笑われてしまうのでは…」といった心配する子はなかなか発言できないでしょう。子どもたちの思いに配慮しながら、同じ仲間として共に学習しているんだという、信頼関係を培っていくことが大切です。【Q.18 参照】



Q. 12 机間指導時に気を付けることは何ですか。

A. 机間指導は、子どもの状況をつかむことが大きなねらいとなります。一斉授業の場面では、子ども一人一人がどこでつまずいているのか、どんなことを考えているのかということ把握することがとても難しいものです。また、グループ活動の場面においても、子どもがどのようにかかわり合っているのかを一度に把握するのは不可能といってよいでしょう。

そこで、机間指導をすることで一人一人の状況やグループ活動の様子をつかむことが必要になってくるのです。この時に大切にしたいことは、授業展開に応じて、明確な意図をもって行うということです。ただ何となく子どもたちの席をまわるようなことでは、机間指導の意味はありません。何のために机間指導をするのか、その意図によって対象となる子どもも当然違ってくるのです。

### ○学習内容の個別支援をする

適切な個別支援を行うために、子どもに寄り添って様子を観察することは、とても大切なことです。学習課題に対して、どこでつまずいているのか、どこまで理解しているのかなどをつかんで個別に支援をします。そのためには、一人一人の実態把握が日常からなされていないといけません。また、つまずいている子ばかりではなく、理解が早い子やグループに対しても状況に応じた支援が必要になります。

### ○学習課題に対する子どもの考えや活動を把握して次の展開に生かす

学習課題に対して、一人一人の子やグループがどのような考えをもっているのか、活動をしているのか等を把握して、次の学習活動や展開につなげることが大切です。例としては、机間指導の後で、まわりの手本となる考えや活動を紹介したり、相反する意見の子どもを意図的に指名したりすることが考えられます。そうすることで、日ごろは発言の少ない子どもの意見を取り上げることもつながります。

### ○子どもを励ます

一斉授業では、子どもたちと個別に話す時間は限られてきます。そこで、机間指導の中で、一人一人への肯定的な声かけをすることによって、子どもたちのやる気を育てる時間にもなります。



#### 押さえないポイント

- ① 順番を考える…机間指導をする時には、ランダムにまわるのでは効率が悪くなります。限られた時間でどのようにまわるのかをあらかじめ計画しておくとい良いでしょう。
- ② 声の大きさを考える…個別指導は小さな声で行うのが基本ですが、他の子のヒントになったり、その子のよさを広めたりしたい場合は、学級全体に聞こえる声で言うことも必要です。【Q. 9 参照】

Q. 13 板書が苦手です。子どもたちにわかりやすい板書をするためには、どんなことに気を付ければよいのでしょうか。

A. 板書は、授業で教師が指導する内容について、子どもが考えたり、理解を深めたりするために行います。そのためには、1時間の学習のねらいや授業の流れが板書で適切に示され、必要な知識や理解事項などが整理された形で示される必要があります。そこで、次のことを板書する内容として考えてみましょう。

- ① 単元（題材）名
- ② 学習のめあて
- ③ 学習活動の見通し
- ④ 理解させたい内容の要点
- ⑤ 子どもの発言、発表
- ⑥ 全体のまとめ など



これらのことが板書に整理されていると、視覚的な面から、子どもたちの思考の促進や学習の理解につながっていきます。そこで、誤字・脱字をなくし、色彩に工夫を凝らしたり、図や表を取り入れたりするなど視覚に訴えるような板書を心がけたいものです。また、ノート指導との関連を図りながら板書を考えることも大切にしたい点です。

具体的には以下のことに気を付けましょう。

#### ○板書のレイアウト

何をどこに板書するか、どのように黒板を使っていくかということです。書く位置をあらかじめ考えておいて、最終的には、一目で内容がわかるような工夫をすることが大切です。チョークを使って書くだけでなく、カードや模造紙にあらかじめ書いておいたものを貼ることも考えられるでしょう。その際は、全体のレイアウトを構想しておく必要があります。また、教師が書くだけでなく、児童生徒に書かせるようなことも展開の中ではあると思います。こうした板書計画を事前に立てるとともに、授業の展開の中で、最初の計画に修正を加えていくことも重要です。

#### ○板書のタイミング

いつ板書するか、どんな時に板書するかということです。授業を中断しないで、いかに授業を盛り上げていくかということにかかわってきます。子どもの表情や緊張ぶりを、うまくつかみながら板書することが大切です。このタイミングが悪いと、教師が後ろ向きになっている時に、子どもの発言があったり、ざわついてしまったりすることになってしまいます。

#### ○板書のスピードと立ち位置

板書の文字を丁寧に書くことは当然大切なことです。それに加えて、スピードにも気を配りましょう。低学年では、教師の板書のスピードが、子どもにノートを書かせるスピードを教えることにもなります。また、正しい筆順のお手本にもなります。学年が上がるにしたがって、ゆっくり書いたり、速く書いたりする場合も出てきます。子どもの思考のテンポに合わせたり、子どもの発言が次々に出る時などは、要約してまとめて書いたりすることもあります。また、子どもにとって見えやすい位置で書くことも大切な要素です。

Q. 14 発達の段階に応じたノート指導をするためには、どのようなことに気を付ければよいのでしょうか。

A. ノート指導においては、ノートに書いたりまとめたりする技能を教えた分だけその技能は子どもたちに身に付くと言えます。そして、発達の段階に応じたノート指導を行うことによって、学習意欲や学習内容の理解につながっていきます。



#### ○小学校低学年のノート指導

この時期は、文字を書くこと自体が学習となります。したがって、練習的な使い方が中心となるでしょう。時間を十分にとって、文字や記号の書き方を指導しながら、丁寧に書かせることが大切です。

#### ○小学校中学年のノート指導

学習活動に少しずつノートを生かしていくようにします。考えたことや感じたこと、わかったことやわからないことなどを書きとめさせ、それぞれの項目別に分けて書かせるなどの工夫をさせるようにします。

#### ○小学校高学年のノート指導

ノートに書く内容や書き方に、個性が出てくる段階です。予習や復習を含めて自分の思考の流れが見えるようなノート作りができるようにしたいものです。また、人の話を聞きながら、あるいは、調べながら書くことができるような指導の工夫が必要です。また、色を分けて絵や図などを書いたり、復習しやすいノートを作らせたりすることも、この時期には習得させておきたいものです。

#### ○中学校～高等学校のノート指導

この時期の子どもたちの傾向として、教師の書く板書のみを機械的に写し取って、テストの前にそれを見て暗記するということがあります。小学校の頃からの継続的なノート指導が必要ではありますが、情報の収集や処理の仕方を培う基礎になったり、学習意欲や理解につながるためのノートになったりする指導を改めて確認しておく必要があります。

教師からの励ましや支援を基盤として次のことにも留意しましょう！

#### ◇学習の足跡がふりかえられるノートに

復習のために役立てられるような欄をページの中に作りましょう。学習を進めていく過程で、前時の学習内容を振り返る時には、自分の考えが整理されたノートが大きな効果を上げることは言うまでもありません。

#### ◇学習内容を定着させるためのノートに

練習を積み重ねることによって、知識の定着や学習内容の理解につながります。たとえ練習であっても、ノートに丁寧に書く習慣を身に付けさせましょう。

#### ◇自分の考えをまとめるノートに

いろいろな事実や資料を通して、考えたことや知ったことを自分の言葉で書かせたり、イメージしたことを図や表に表現させたりするようにしましょう。ただ記録するだけでなく、書くことで、さらに新たな考えを生み出すという視点にも留意したいものです。

Q. 15 授業でワークシートを使うことが多いのですが、何か気を付けることがありますか。

A. ノートやワークシートには、子どもたちに知識を習得させたり思考を活性化させたり、学びの振り返りをさせたりする働きがあります。そこで、何のためにワークシートを使うのかということを明確にしておくことが重要です。

ノートとワークシートの大きな違いは何でしょう？ノートには、あらかじめ図や表、吹き出し、練習問題などは書かれてはいません。そこで、これらが示された共通のワークシートを活用することで、子どもたちの学びを促進させることができます。つまり、ノートに書かせることに加えて、補助的にワークシートを活用することが大切なのです。

#### ○知識・理解を定着させる

算数で、計算技能の習熟を図るために、授業の後半で練習問題に取り組みさせることがあります。この時に、間違えた問いだけを集めた問題集を作って、授業の復習に活用させることで、子どもたちに自分の不得意な学習領域を自覚させることができます。

#### ○思考を活性化させる

算数で、図形の面積を求める場合に、考える手がかりとして図形に補助線を引かせるためのワークシートを用いたり、理科の実験で予想を立てやすくするために、図で示した仮説から選択できるように準備したりすることもあります。このように、子どもに考える手がかりを与えたり、考えをもたせたりするために活用する工夫が考えられます。

#### ○考えをまとめさせる

国語の物語文の読み取りにおいて、登場人物への思いをまとめさせるためのワークシートや、説明文の仕組みを構造化するために段落ごとに区切ったワークシートを準備したりします。このように枠を用意することで、子どもが考えをまとめやすくなることにつながります。

#### ○学びを振り返らせる

小学校の生活科で、植物の成長記録を活字やイラストでワークシートにまとめ蓄積していくことで、植物の成長とともに子どもの学びを振り返ることができます。この蓄積が、子どもと教師の学習の足跡であり宝物となります。【Q. 6 参照】



※一般的に、文字や記号などを筆記する場合には、漢字表記の『書く』を、図や絵などの場合には『かく』や『描く』などを使うことが多いようですが、本書では『書く』を統一して用いています。



### 教科書『を』教える？ 教科書『で』教える？

教科書は学習指導要領に基づいて作成されていますので、必ず使用しなくてはなりません。私たちは、教科書という教材を通して学習指導要領に示された内容を教えることになっているのです。ただし、教科書の内容をそのままぞるだけでは、教科書**を**教える授業になってしまいます。教科によっては、教科書**を**教えるということもありますが、子どもたちにどんな力を付けたいのかということを考えた時に、教科書**で**教えるという発想はとても大切です。例えば、国語の説明文では、1つの文章の読解に終わるのではなく、そこで培われた力が他の説明文を読んだり、文章を書いたりする時に活かされるような指導が必要となってくるのです。



### 教具は授業の名脇役！？

教科書が授業の主役だとすれば、教具は授業の名脇役といえるでしょう。教具には、活字のものや写真、模型、CD、DVD、スライドなどさまざまなものがあります。いずれも視聴覚や触覚に訴えるものです。授業で付けたい力に即した教具を使用することによって、その効力は大きく発揮されます。また、それぞれの教具の特質をよく理解して活用することで学習指導の効果は高まります。



Q. 16 小集団（グループ）学習などの学習形態を工夫してみたいと思います。どのようなことに気を付けて実践したらよいのでしょうか。

A. 主な学習形態には、『一斉学習』『小集団学習』『個別学習』などがあります。授業のどの場面で『小集団による学習』形態を取り入れたら、その時間の指導のねらいを達成するために効果的なのかを考えて実践することが大切です。

### ○小集団の学習形態の長所

大きく2つのメリットが挙げられるでしょう。1つは、学習への意欲を高め、学習の成果を上げていくという点であり、もう1つは、人間関係やコミュニケーション能力の育成が図られるという点です。



一斉学習では発表する子の人数は限られ、その他の子どもは聞き役になりがちです。また、全体の場で意見を言うのが苦手な子も、小集団の中では、自分の意見を気軽に話し合ったり、質問し合ったりすることも可能になってきます。

このような相互作用による集団思考が授業を活性化させ、児童生徒個々の学習を深めていくこととなります。また、言語活動の充実という視点でも注目されている方法でもあり、小集団学習を適切に取り入れることで、子どもたちの学力が向上したという報告もあります。

### ○目的をもって取り入れること

何のために小集団学習を取り入れるのかを明らかにしましょう。グループ内で仲良く助け合い、意見交換が充実した授業の後には、満足感を感じるものです。しかし、本時のねらいを達成できなければ、その小集団学習は有効であるとは言えません。子どもたちが学び合う姿勢を養うことは大切なことですが、教科のねらいを達成するための手段としてふさわしいかどうかを考えることの方が重要なのです。

小集団学習は授業のねらいを達成するための1つの手段であって、それ自体が目的にならないように気を付けたいものです。

### ○適切な指導を行うこと

小集団学習を行う前に活動内容やねらいを明確に指示したり、途中で各集団を観察して適宜アドバイスしたりするなど、教師は適切な指導を行う必要があります。小集団での学習に慣れていない子や話合いに参加できなくて孤立しがちな子もいますので、教師はその子に声がけしたり、集団の他の子に働きかけたりするなどの支援を行うようにします。

### ○他の学習形態と組み合わせること

小集団学習を一斉学習や個別学習などを上手に組み合わせることで、学習効果を上げていくことが大切です。

一斉学習は、基礎的・基本的な事項の説明や指示などによって、教師から直接的に働きかけ、知識や技能を伝える際に効率的です。また、小集団学習で出された意見を学級全体で整理・確認、比較検討していく場合にもこの形態が基本となります。

一斉学習や小集団学習の前に、個別学習の時間を取り、自分自身で考えさせたり、小集団学習の途中や一斉学習の後に振り返らせたりすることも重要です。集団での学習場面だけでなく、個別学習の場面を設定するようにしましょう。

Q. 17 ユニバーサルデザインを意識した授業とは、どのような授業ですか。また、具体的な工夫例を教えてください。

A. ユニバーサルデザインとは、すべての人が利用しやすく、暮らしやすいように、ものづくりやまちづくり、環境づくりを行うという考え方です。この考え方を授業に取り入れるということは、クラスの中のすべての子どもにとってわかりやすい授業を行う、ということになります。つまり、特別な支援を要する子どもに配慮した授業づくりをしていくことが、学級のすべての子どもにとってわかりやすい授業となると考えることができます。

### ○見通しをもたせる工夫

先が見えない状況や曖昧な状況に弱い子どもにとっては、1時間の授業の流れや次にすることがわかることで、見通しがもて、安心して課題に取り組むことができます。その場合、次のような目に見えるようにする工夫（視覚化）を行うことが大切です。

#### ◇授業の初めに学習する内容の進め方について全体的な見通しを提示する

1時間の学習の流れを黒板の同じ場所に板書したり、事前に紙に書いて作っておいて、黒板に貼ったりすることなどの工夫をしましょう。ある程度パターン化されていて、いつも出てくる内容については、マグネットシートなどを常時使って、貼ったり取ったりすることもできます。

#### ◇授業の進行場面がわかるようにする

授業展開の中のどの場面なのかがわかるようにしましょう。例えば、授業の流れを板書した横にマグネットなどを付け、内容が進むにつれて、それを目印として移していくということもできます。

また、時間配分を目に見えるようにして、時間の区切りを明確にする必要もあります。作業や学習課題に取り組む場面で、「区切りのよいところでやめなさい」「そろそろやめなさい」というような指示では、なかなか終われないということが起きてしまいがちです。区切りを明確に示すにはタイマーなどの活用が有効です。

### ○情報伝達の工夫

#### ◇指示・伝達事項は聴覚的・視覚的に提示する

聴覚認知（耳から入ってくる事柄の情報処理）や視覚認知（目から入ってくる事柄の情報処理）、記憶（入ってきた情報を保持しておくこと）などの『かたより』から、学習上のつまずきが生じる子どもがいます。例えば、視覚認知にかたよりのある子どもには、漢字の習得の困難さがみられたり、聴覚認知にかたよりのある子どもは、指示を聞き落とすことが多発する場合があります。

こうした特徴のある子どもに対しては、情報がいろいろな感覚から入るように工夫する『多感覚刺激』という方法が有効です。特に、授業は聴覚情報を中心に組み立てられていますので、情報の視覚化を意識するとよいでしょう。また、板書やICT等を活用して、視覚的にわかりやすい提示をすることも効果的です。

【Q. 13 参照】

### ◇具体的な表現で伝える

例えば、音楽の指導で教師が「ちゃんと歌いましょう」と指示しても、どういう状態が『ちゃんと』しているのかが子どもにはわかりません。大きな声を出して歌うのか、姿勢を正しくして歌うのかなど、具体的に指示する必要があります。

また、今すべき活動がはっきりとわかるように、1回に1つの発問や指示をすることや、簡潔な話し方を意識することも大切です。【Q. 9、Q. 10 参照】

### ○授業への参加を促す工夫

わからないことがあった時に、質問したくてもできない子もいます。机間指導は、個別に支援をするチャンスです。わからない時のハンドサインを決めておくなど、教師からの助言を受けやすくする工夫があると、子どもには「手助けしてもらえろ」という安心感が生まれるでしょう。また、文字がぎっしり並んだ教科書を目で追いながら読むことが苦手な子どもには、1行分の大きさに合わせて切り抜いた補助具を活用することで読みやすくすることもできます。

発表の場面において、なかなか発表することができない子には、ペア学習やグループ学習を取り入れて自分の考えを発表し合える場面を設定したり、よいつぶやきを教師が取り上げたりして発言に結び付けることもできるでしょう。逆に自分の思いばかりを発表したがる子どもには、どのようなルールで発表できるかなどを説明し、その行動を定着させることも必要です。

注意力の持続に課題が見られる子には、次にすることが用意されているなど、課題の内容や進め方に少しずつ変化をもたせることも十分な支援になります。注意が散漫にならないために、視界に配慮して学習に関係のない掲示は外したり、カーテンを閉めたりすることもあるでしょう。

### ○学習課題への取組を促す工夫

授業では、多くの情報から大事なことを見つけたり、関連を理解したりする活動があります。情報を処理・整理したりすることが苦手な子どもにとっては、ワークシートを活用して学習の進め方や段取りなどがわかりやすくなるような工夫がされていると、困り感をカバーすることができます。【Q. 15 参照】

また、1つの学習課題を解決するために、課題を細分化して、同じ課題でも易しい内容から難しい内容への段階を増やし（スモールステップ化）、無理なくクリアしていけるように学べる場を用意したいものです。課題に対して強い苦手意識をもっていたり、自信をなくしていたりする子には、学習課題そのものを拒否することもあり得ます。課題をスモールステップ化し、段階ごとに「できた」という達成感をもたせることが学習への意欲にもつながります。

一人の子どもにかかりきりになってしまい、結果として学級全体の指導ができにくくなるケースが見られます。子どもが落ち着いて学習活動できる基盤づくりとともに、ユニバーサルデザインを意識して授業改善を図っていききたいものです。



Q. 18 『よい授業』を行うためには学習環境を整える必要があると思います。学習環境にはどのようなものがあるのでしょうか。

A. 授業の多くは、学級を単位として行われます。『よい授業』を行うためには、学習環境の1つとして、学級の雰囲気を整えることが極めて重要です。学習環境には、学習場所としての環境（物的環境）や学習集団づくり、学習習慣の育成など（人的環境）があります。学級担任を中心に、全教職員が協力して進めていくことが重要です。

### ○教室環境の整備

環境づくりは掃除や整理整頓から始まります。学習の場を、清潔で落ち着いた空間にしておくことが大切であり、机・いすの並びや黒板の汚れ取り、学級用図書の整頓など、授業に入る前に整えておく必要があります。

また、適切な室温や照明、換気などにも気を配りましょう。

掲示物の工夫も重要です。子どもたちの学習の成果物や学習内容に関する資料等を掲示し、学習の意欲付けを図ることは大切です。外れかけた掲示物をすぐに留めたり、定期的に新しい物に貼り替えたりするなど、掲示物を大切にすることが子どもを大切にすることにつながります。

子どもたちが学習に集中できるように、掲示物を貼る場所も考えましょう。

### ○学び合う集団づくり

子どもたち同士や子どもと教師の人間関係づくりは『よい授業』づくりの大きなポイントになります。一人の児童生徒の意見を学級の友だちが認めてくれるような学習集団を育てる必要があります。すべての子どもが学習に参加でき、互いの学習を深めたり広げたりすることができるように、安心して学び合える集団づくりを目指しましょう。

学習規律も大切な要素です。授業中の私語や学習用具などの忘れ物、授業への遅刻などが現れてくると、『よい授業』どころではなくなってしまいます。授業妨害も含めて、早期に毅然とした指導をする必要があります。『よい授業』を期待する、子どもたちからのサインとして受けとめる視点も必要です。

### ○学習習慣等の育成

子どもたちの学習習慣を育てていくことはたいへん重要です。また、基本的な学習方法を身に付けさせておくことも必要です。授業の中でも、各教科の意義や日常生活との関連、学習の仕方や予習復習の進め方、テストの受け方などについて計画的に指導していくことです。家庭と連携しながら進めていくことも大切です。

### ○教師自身が大きな学習環境

教師のものの考え方や感じ方、行動の仕方、子どもたちへのかかわり方など、すべての言動が影響を与えます。教師自身が最も大きな学習環境になっているということからも、児童生徒を大切に、一人一人を尊重する姿勢が必要です。



Q. 19 授業で学習したことを家庭学習（宿題）につなげたいと思います。何か気を付けることがありますか。

A. 家庭学習を充実させるためには、授業で学習したことがつながるように支援していくことが大切です。授業で指導できなかったところを「あとは家で宿題としてやっておこうね…」と行って、学習すべきことをすり替えるようなことがないようにしましょう。

主に、家庭で学習するように教師が出す課題のことを宿題といますが、子どもによっては、自主学習の習慣が身に付いていないことや、自分の力で課題を解決することが難しい状況が予想されます。

日々の学びを振り返ったり、次に習う学習内容を事前に予習させたりすることを促しつつも、子どもに過度な負担がかからないよう、教師の適切な配慮が大切になってきます。

### ○宿題の目的

宿題の目的には、『漢字や計算問題といった知識の定着や技能の向上』『家に帰った後も必ず一定時間机に向かう習慣を身に付けること』『子どもたちに自分自身で考える習慣を身に付けさせる』の3つが考えられます。



### ○宿題の出し方

宿題は学習効果を高めることを目指しています。そのためには、次の条件を考えて宿題を出すことが必要です。

#### ◇子どもの能力に合った宿題を出す

程度の高いものや、子どもの生活経験から離れたものではなく、子どもの必要感や意欲、興味を考えて子どもが積極的に取り組めるような内容を考えましょう。

#### ◇具体的な数量と方法を明示する

漠然とした課題を与えるのではなく、具体的な数量と方法を明示しておくことが大切です。例えば「△△と考えた理由をノートに2つ書いてくること」「3回読んで、それぞれ何がわかったのかを書いてくること」など、具体的に示していくとよいでしょう。

### ○事後指導

子どもが宿題をやってきたら必ず評価をします。その際に、本人の頑張りや工夫した点などを認め、温かい評価言を返していくようにしましょう。また、学習の仕方について適切に助言をしたり、参考になる資料があれば宿題に添えて渡したりするなど、子どもが「頑張ろう！」という意欲をもって、継続的に取り組んでいけるように支援しましょう。

### ○自分の意志で学ぶ方法を育てる

宿題は、多くの子どもたちが好む学習活動ではありません。しかし、学力を高めていくためには、避けて通れないことであり、その地道な努力が確実に実を結ぶという実感を味わわせることが大切です。そのためには、時間と手間がかかりますが、学び得た喜びや学習意欲は一生の財産となり、子ども自身の『生きる力』

となって脈々と生きていきます。

また、授業と家庭学習とをつなげていくことはとても重要なことです。特に、小学校低学年の家庭学習では、家庭との連携によって『学習の仕方』を身に付けさせることが大切です。子どもが教室を離れても、自分の意志で学び続けるための基盤づくりこそが、家庭学習（宿題）の最も重要な意義と言えるでしょう。



### 学習意欲を高める

子どもたちの学習の心構えをつくり、学習意欲を高めるために、学習の目的や目標を意識させることが有効です。



意識させる方法として、次のような指導のポイントが挙げられます。

- ①教師が学習内容についての目的や目標を具体的に示すこと  
何を何のために、どこまで、何を目指して学習するのかを具体的に示すことで、やる気につなげることができます。
- ②中間の目標を立て学習させること  
遠大な目標だと、子どもにとっては具体的になりません。途中の目標を決め、達成感を味わわせることです。
- ③やや難しい目標を立て、挑戦させること  
努力して困難を乗り越えることにより成就感を味わうことができます。
- ④家庭学習で学習時間や学習内容の目標を立てさせること  
「毎週、7時間学習する」「毎日、何時から何時まで学習する」「毎日、問題を3問ずつ解く」「夕食後すぐ、宿題に取りかかる」というように、学習時間や学習内容などについて目標を立てさせるとよいでしょう。実行した結果をグラフに書き込ませると、一層効果があります。

Q. 20 『よい授業』をするために、機会を見つけて研修会に参加するようにしています。他に心がけておくとよいことがありますか。

A. 自分の授業をよりよいものにしていくためには、授業研究を継続的に進め、自己研鑽に励むことが大切です。

### ○授業を公開する

自分の授業を公開し、より多くの人に参観、評価してもらうなど場数を踏むことで授業力は高まっていくものです。そのためには、次のことを行うとよいでしょう。

①簡単なものでよいので指導案を準備し、授業を公開する。

②授業後に参観者から意見をもらう。その助言に耳を傾け、取り入れるべきことを精選する。(中学校や高等学校では他教科の教員からもヒントを得ることがあります。)

授業後に、自分自身の指導の振り返りを行うのは当然のことです。

授業づくりについて、いろいろな疑問や迷いが出てきたときには、同僚に相談しましょう。他の教師も同じような悩みを抱え、苦勞しているものです。一緒に考えることで新しいアイデアが生まれることもあり、お互いを高めることができます。

### ○授業を参観する

同僚に「今度、先生の授業を参観させてください。先生の□□の指導方法について勉強させてもらいたいのですが・・・。」と申し出て、授業を見させてもらいましょう。その際、視点を決めて授業を見るようにすることが重要です。

また、研究協議があれば、必ず出席するようにしましょう。授業者の意図を確認したり、参観者の意見を聞いたりすることで、指導観や教材観を深めたり、多様な視点で授業をとらえたりすることができます。学習指導案作成の際のヒントが得られる場合もあります。協議の中で、授業者に対する感謝の気持ちを表しながら、自分の意見を述べるとよいでしょう。

### ○教材研究を深める

書物を読んだり、指導事例を探したりして、教材研究を深めることが大切です。授業の導入段階で利用できるものや子どもの意欲を喚起できるような教具のヒントを得るためにアンテナを立てることです。近年は、インターネット等で情報を瞬時に得ることができるようになり便利になりました。その際には、著作権等に配慮しながら、正確な情報を正しく扱うようにしましょう。【Q. 4 参照】

### ○実践記録を残す

日々の授業実践で感じたことや子どもの反応など、気付いたことをこまめに記録に残すようにしましょう。略案や授業で用いた資料などは、次年度以降の授業計画の参考になります。これらは長い教員生活の大きな財産にもなります。

### ○児童生徒に授業を評価させる

子どもたちが授業をどう受けとめているのかを把握することは、授業改善の大きなヒントになります。児童生徒に授業アンケートを実施し、その結果を参考にしていくとよいでしょう。





## 参 考 文 献

- 『教育基礎技術叢書4 教科別板書のしかた』 植野八重子他著（あゆみ出版）
- 『わかる授業 若い教師のための授業の手引き 小学校編』  
北九州市教育委員会指導部編（あらき書店）
- 『わかる授業 若い教師のための授業の手引き 中学校編』  
北九州市教育委員会指導部編（あらき書店）
- 『誰でも成功する 発問のしかた』 加藤辰雄著（学陽書房）
- 『野口流 授業の作法』 野口芳宏著（学陽書房）
- 『野口流 教師のための話す作法』 野口芳宏著（学陽書房）
- 『シリーズ明日の教室 学級経営・基礎の基礎 3 授業をつくる』  
「明日の教室」研究会編（ぎょうせい）
- 『新しい学習評価のポイントと実践』 小島宏/岩谷俊行編著（ぎょうせい）
- 『思考力・判断力・表現力等を育成する方策』 横浜国大附属横浜中学校編（三省堂）
- 『通常学級での特別支援教育のスタンダード』  
東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫悟編（東京書籍）
- 『授業研究法入門』 河野義章編著（図書文化）
- 『図でわかる教職スキルアップ1 子どもに向き合う授業づくり』  
生田孝至著（図書文化）
- 『学習評価基本ハンドブック』 辰野千壽著（図書文化）
- 『学習意欲を高める12の方法』 辰野千尋著（図書文化）
- 『図でわかる教職スキルアップ3 学びを引き出す学習評価』 北尾倫彦著（図書文化）
- 『指導と評価 2006年3月号、4月号、11月号、2008年3月号、2010年3月号』  
（日本教育評価研究会）
- 『プロ教師の「超絶」授業テクニック』 中土井鉄信著（明治図書）
- 『よい授業を創るシリーズ32 よい授業を創る教え方の基礎技術』  
辻畑信彦/荒木隆著（明治図書）
- 『教育科学 国語教育 2009年12月号』（明治図書）
- 『授業技術Q&A』 山口大学附属山口中学校編
- 『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』 中央教育審議会
- 『フリー百科事典 ウィキペディア』